

⑫ 公開実用新案公報(U)

昭63-197541

⑥ Int. Cl.⁴
A 61 J 1/00
// B 65 D 47/12

識別記号 3 1 3
庁内整理番号 A-7132-4C
7347-3E

④ 公開 昭和63年(1988)12月20日

審査請求 未請求 (全2頁)

⑭ 考案の名称 点眼用瓶

⑰ 実 願 昭62-89394

⑱ 出 願 昭62(1987)6月10日

⑲ 考 案 者 桑 山 隆 司 茨城県水戸市住吉町125番1号 株式会社双葉内

⑳ 出 願 人 株 式 会 社 双 葉 茨城県水戸市住吉町125番1号

㉑ 代 理 人 弁 理 士 北 條 和 由

⑯ 実用新案登録請求の範囲

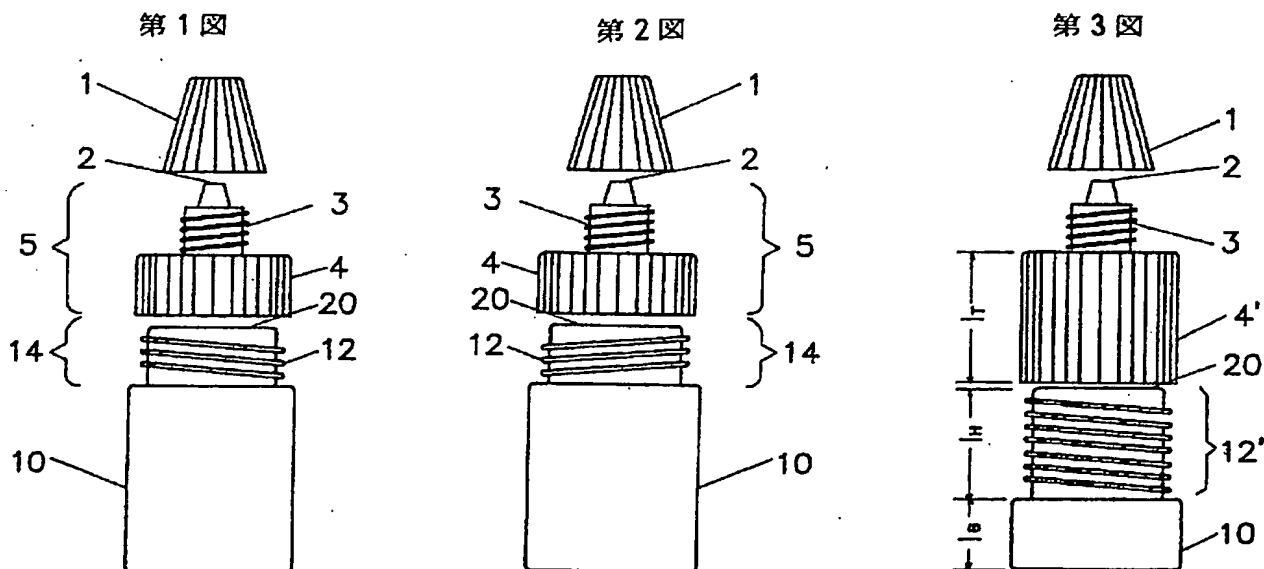
- (1) 点眼薬を充填し、充填された瓶のキャップを外して点眼に用いる点眼瓶において、点眼キャップと、前記点眼瓶に薬を充填後キャップをする本体キャップと、点眼瓶本体とから構成され、前記本体キャップに設けられている点眼キャップ用のネジ部回転方向と前記本体に設けられている前記本体キャップ用のネジ部の回転方向とを逆方向にしたことを特徴とする点眼用瓶。
- (2) 前記実用新案登録請求の範囲第1項記載におけるネジ部において前記本体キャップに設けられている点眼キャップ用のネジ部の回転方向を

右ネジとし、前記本体に設けられている前記本体キャップ用のネジ部の回転方向を左ネジとしたことを特徴とする点眼用瓶。

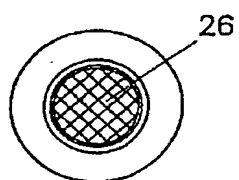
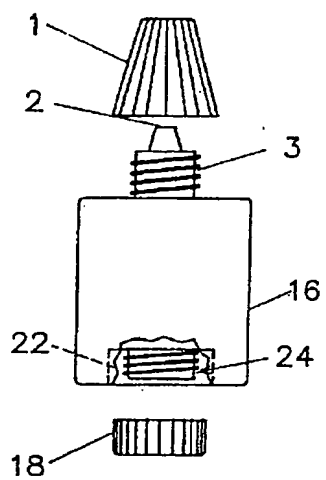
図面の簡単な説明

第1図は本考案の実施例を、第2図は従来用いられている点眼瓶を、第3図は本考案の他の実施例を、第4図第5図は本発明の変形例を、それぞれ示す。

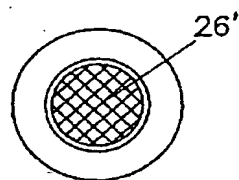
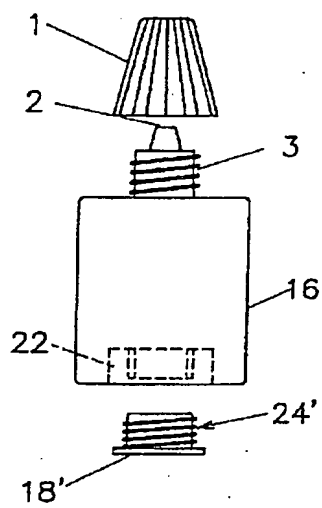
1……点眼キャップ、2……点眼口、3……点眼キャップ用ネジ部、14……本体キャップ用ネジ部、12'……本体キャップ用ネジ部、4、4'……本体つまみ部。



第4図



第5図



公開実用 昭和63-197541

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U)

昭63-197541

⑬ Int. Cl.⁴A 61 J 1/00
// B 65 D 47/12

識別記号

3 1 3

庁内整理番号

A-7132-4C
7347-3E

⑭ 公開 昭和63年(1988)12月20日

審査請求 未請求 (全 頁)

⑮ 考案の名称 点眼用瓶

⑯ 実 願 昭62-89394

⑰ 出 願 昭62(1987)6月10日

⑱ 考 案 者 桑 山 隆 司 茨城県水戸市住吉町125番1号 株式会社双葉内

⑲ 出 願 人 株 式 会 社 双 葉 茨城県水戸市住吉町125番1号

⑳ 代 理 人 弁 理 士 北 條 和 由

明 細 書

1. 考案の名称

点眼用瓶

2. 実用新案登録請求の範囲

(1) 点眼薬を充填し、充填された瓶のキャップを外して点眼に用いる点眼瓶において、点眼キャップと、前記点眼瓶に薬を充填後キャップをする本体キャップと、点眼瓶本体とから構成され、前記本体キャップに設けられている点眼キャップ用のネジ部回転方向と前記本体に設けられている前記本体キャップ用のネジ部の回転方向とを逆方向にしたことを特徴とする点眼用瓶。

(2) 前記実用新案登録請求の範囲第1項記載におけるネジ部において前記本体キャップに設けられている点眼キャップ用のネジ部の回転方向を右ネジとし、前記本体に設けられている前記本体キャップ用のネジ部の回転方向を左ネジとしたことを特徴とする点眼用瓶。

3. 考案の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

この考案は点眼薬を充填し、点眼に用いる点眼用瓶に関する。

〔従来の技術〕

従来用いられている点眼用瓶を第2図により説明する。第2図で1は点眼口2のためのキャップで、点眼に使用するときには、このキャップ1を外し点眼口2からの薬を点眼するものである。5は瓶本体10用のキャップで、薬を充填するときにこれを外し、広口の部分20から所定量の薬を充填する。

点眼口キャップ1と本体キャップ5のつまみ部分4の表面には滑り止め用の凹凸（ギザギザ）部分が設けられていて、点眼キャップ1を外し易いように構成されている。すなわち一方の手で本体の部分4を持ち、もう一方の手でキャップ1を回せば、手の指が滑らないで操作が容易になる。

なお第2図で3は点眼キャップ用ネジ部、12は本体キャップ用ネジ部で両者とも同方向の

回転ネジ部を表している。

〔考案が解決しようとする問題点〕

上記従来例では、点眼キャップを外そうとして瓶本体 10 の部分を持って操作すると、特に点眼キャップがきつようなときは本体キャップ 5 も同時に回転して、点眼キャップ 1 と本体キャップ 5 が一体になったまま外れてしまうことがしばしばある。そのまま点眼しようとする薬をこぼしてしまうなどの欠点がある。特に高齢者等は本体キャップ 5 も同時に外れてしまったことに気付かず瓶を傾け点眼しようとするので、薬をこぼしてしまうことが多い。

また本体 10 を持ち、本体キャップ 5 のつまみ部分 4 を回してしまうこともあって、この場合も薬をこぼしてしまうことが多々あった。

この考案は利用者が点眼キャップを外そうとして本体キャップを外してしまうことがない点眼用瓶を提供することを目的とする。

〔問題を解決するための手段〕

上記問題点は点眼キャップのネジの回転方向

と、本体キャップのネジの回転方向とを逆にし、両者が一体になったまま外れることがないようにすることにより解決される。

また他の手段として本体底部側に薬の充填口を設け、点眼キャップを外そうとするときは本体キャップに触れることが出来ないようにすることによっても解決される。

〔作 用〕

点眼キャップを外そうとして回転させたとき、本体キャップと一体になって回転したとしても、本体キャップはネジの回転方向が逆であって却って外れ難くなるので、本体キャップも同時に外れてしまうことはない。

〔実 施 例〕

以下図面を参照してこの考案の実施例について説明する。第1図に本考案の実施例を示す。第2図と同じ部分には同じ符号を用いている。第2図の従来例との大きな違いは本体10のネジ部14のネジの回転方向にある。すなわち点眼キャップ用のネジ部3（本体キャップ5に設

けられている)の回転方向に対し、本体キャップ用のネジ部14(本体10に設けられている)の回転方向を逆にしていることに特徴がある。両者の回転方向が逆になっていればよいが、通常用いられているネジの回転方向(右ネジ)をキャップ用(第1図の3)に、本体キャップ用ネジの回転方向を左ネジ(第1図の14)にするのが望ましい。

第3図は本考案の他の実施例を示す。この考案の特徴は第1図のつまみ部分4と本体キャップネジ部12に対応した部分は4'、12'の部分にある。すなわち本体10の大部分をネジ部12'で構成したことにある。これに対応してつまみ部4'も第1図の場合に比較して長くなり $l_T = l_H$ の関係にある。こうすることによってキャップ1を外す場合はつまみ部4'の部分を保持し、キャップを外すことになるので、本体キャップも同時に外れてしまうことはなくなる。もし従来技術と同じように本体キャップも同時に外れてしまう場合があるとすれば、本



体10の18の部分保持してキャップ1を回すような場合に限られ、実際問題としてはほとんどおこり得ないことである。この実施例によればほとんどの場合つまみ部4'を保持することになるので本体キャップを外してしまうことはなくなる。またここで1H全体にわたってネジ部を設けた例を示したが下部の方(18に近い方)に第1図の場合と同程度のネジ部を設けてもよい。

第4図は本考案の他の実施例を示す。この実施例は瓶への充填口20を瓶本体の底部に設けた場合の例を示している。すなわち本体16の底部に凹部22を設け、ここから薬を充填し、充填後は蓋18をネジ部24を利用して密閉する方法である。この方法によれば本体16のどこを保持してもキャップのみを取り外すことができるという特徴がある。26は蓋部の滑り止め部を表している。充填時は簡単な治具上に瓶を逆さにしておこない、充填後正常に瓶を立てればよい。



第5図は第4図の変形例を示す。これはネジ部24'をもつ蓋部18'を回転させて密封する構造を有する。26'は蓋18'の滑り止め部をである。

[考案の効果]

本考案によれば点眼瓶のキャップ取り外し時、誤って本体キャップを外してしまうことがなくなる。

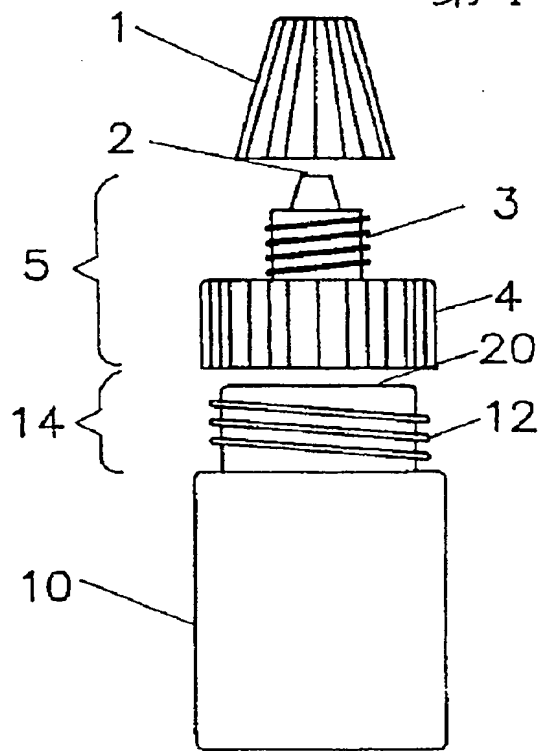
4. 図面の簡単な説明

第1図は本考案の実施例を、第2図は従来用いられている点眼瓶を、第3図は本考案の他の実施例を、第4図第5図は本発明の変形例を、それぞれ示す。

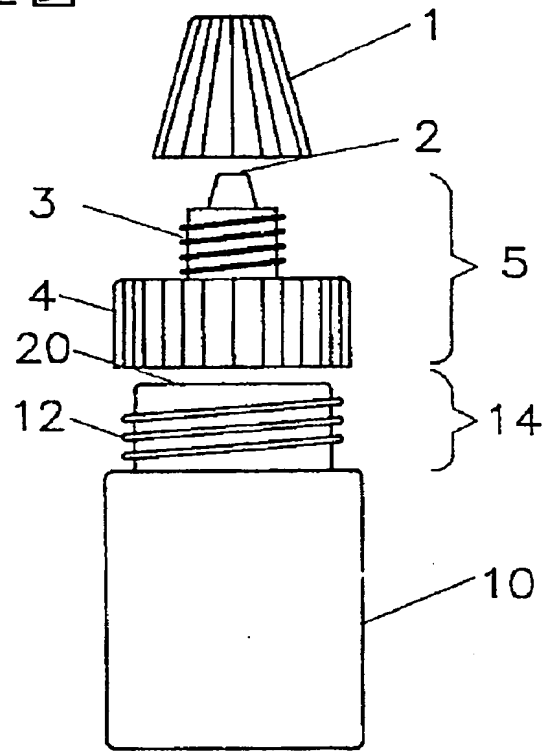
1…点眼キャップ 2…点眼口 3…点眼キャップ用ネジ部 14…本体キャップ用ネジ部
12'…本体キャップ用ネジ部 4、4'…本体つまみ部

実用新案登録出願人 株式会社 双葉
代 理 人 弁理士 北條 和由

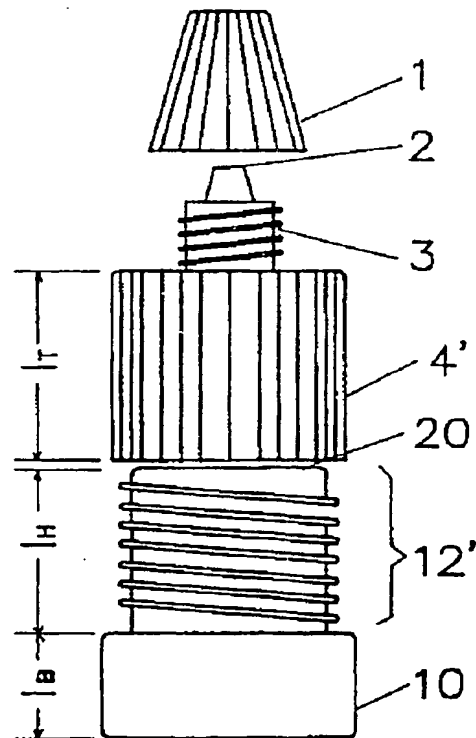
第1図



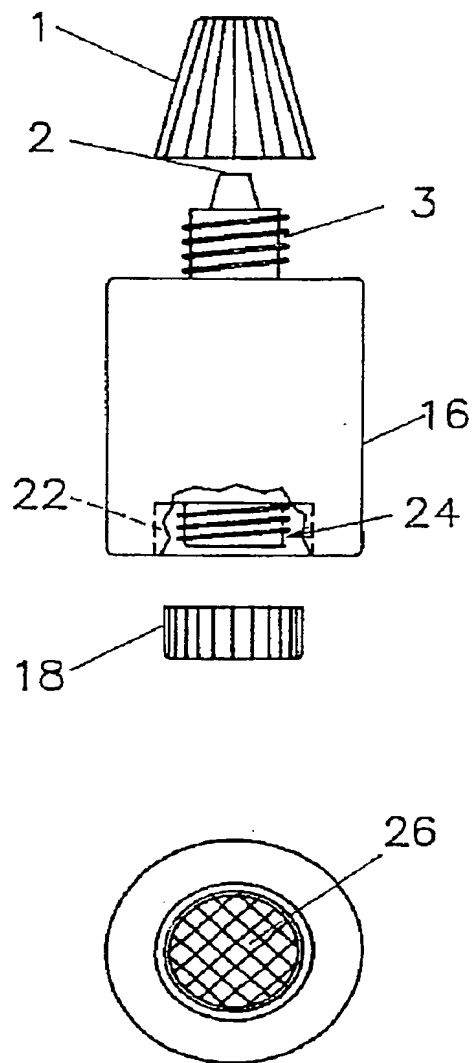
第2図



第3図



第4図



第5図

